

主人を選ぶとき

ヨハネによる福音 6:60-69

（そのとき、）弟子たちの多くの者は（イエスの話）を聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」

このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

説教

人間は不自由です。親を選ぶことはできません。また、国家を選ぶこともできません。でも、実際はあるていど成長したら親を拒否することもできます。また、同じように国籍を変えることもできます。これらは長い歴史の間で人間が不自由を克服してきたあかしです。きょうの福音は5000人の給食からはじまった長いヨハネ福音書によるイエスの説教のしめくくりです。イエス

はどう締めくくったかという「主人を選びなさい」と弟子たちに迫りました。

「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとの来ることにはできない』と言ったのだ。」このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。ヨハネ6:65-66

限られた肉の命を生きる中で、主に出会い、信じ、そして知ることは素晴らしいことです。いまのわたしたちから見れば、5000人の給食を目の当たりに体験し、そこでイエスに従い始めた弟子たちはうらやましい限りです。主人を選ぶということはイエスにつまづくことではなく、信じ従うことです。どうして多くの弟子たちは離れ去ったのでしょうか。イエスを主人として選ぶことができなかったのでしょうか。

イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。ヨハネ6:64

見事に言い切っています。あらかじめ決められた人が神を信じる。「父からお許しがなければ、だれもわたしのもとの来ることにはできない」といいます。逆に言えば、裏切り者はお見通しだというわけです。

わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。ヨハネ8:31b-32

わたしたちは主人を選ぶことに関しては自由です。この「信教の自由」とよばれる自由も歴史のなかで勝ち取ってきた尊い自由のひとつです。キリスト教は真理であり自由です。しかし、キリスト教は「教会に真理あり」とイエスの教えを捻じ曲げた暗い歴史ももっています。キリスト教をとおして神を知り、真理を知る、イエス・キリストをとおして神を知る。それは手掛かりの一つであることも確かです。おおくの間違いを犯し、それを正してきた歴史をもつキリスト教は世界には多くの宗教があり、宗教の違いは対立ではなく共存だという立場にたどりついています。

いまのわたしたちは教会にとらわれることなく自由な個人として「主人を選ぶ」ことができます。人生のなかで、わたしたち一人ひとりがいつかまた主人を選ぶときがやってきます。

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」ヨハネ6：68-69

その時、ペテロのように力強くあかしすることができますように。
